

# 『Unnamed Memory』

## 『このライトノベルがすごい！ 2020』単行本第1位

電撃の新文芸(レーベル名です)より発売中。

第4巻、2020年1月17日発売。

文:古宮九時 画:chibi



「呪いを解くってどうやってやるんだ？」

ごく平穩なある日、王太子であるオスカーは執務室を訪ねてきた女に問うた。

黒髪黒目の絶世の美女、彼の呪いの解呪に取り組んでいるティナーシャは、長い睫毛を揺らして瞠目する。

「ずいぶん基本的なことを気にするんですね」

「散々周りに解けない解けないと言われたからな。どこで引つかかるのか気になった」

「それは解析とか対抗構成の組み立てとか色々引つかかるところありますけど……」

漆黒の目が煌めく。彼女は艶やかに微笑んだ。

「貴方の場合は全部ですね」

「全部」

「魔法のかけた呪いでもん。何もかも大変ですよ。今は解析に時間かかってますけど」

大陸中で恐れられる魔法は、人でありながら人を超えた魔法士だ。彼女たちは何百年も大陸の影に佇んでおり、普通の人間が相手にできるものではない。そんな魔法の呪いを幼少時に受けたオスカーは、机に頬杖をついて彼女を見上げた。

「解析か。この前俺の血を持っていつてたな」

「貴方がかけられたみたいに『子供ができない呪い』とかは

如実に肉体に影響が出ますからね。被術者の肉体を分析して構成抽出するんですよ。髪とか爪とか血と唾液とか精液とか

肉片とか、そういうのをもらって抽出しますね」

「最後の方が引つかかるんだが。肉片ってなんだ」

「別に全部必要なわけじゃないですもん。途中で事足りればそれ以上は要りません」

そういう彼女は血と爪をもらっていっただけで、その後特に要請はない。この二つで足りたということなのだろう。肉片を要求されても応えるつもりはあるが、そこに至るまでに

もう少し面白みがあっても楽しめた気がする。

そんな彼の考えを知らないティナーシャは、細い腕で腕組みする。

「構成抽出は終わってるんです。その後の解析が大変ですね。正解を見てなかったら解析に十年くらいかかったかも……」

「十年か。三十歳だしまあ俺はいいかな。十年後に『やつぱり駄目だった』と言われたら困るが」

「言いませんよ！ ちゃんとやりますよ！」

「三年駄目だったらお前が子供を産むってことでもいいか？」

魔法の呪いを上回れる、と断言している女。それは呪いを解ける、という意味だけでなく、彼女自身が魔法の呪いに影響を受けないという意味でも同じだ。

男の問いに彼女は目を丸くし、だがすぐに柔らかく笑う。

「ええ。私が貴方の子供を産みましょう。ご安心ください」

何の迷いもなく、嫌悪もなく。

そこにあるのは無垢な献身だ。オスカーは自分が問うておきながら彼女の即答に肩を寄せた。苦みを噛み潰した声音で

言う。

「もうちよつと嫌がれ。面倒事だろうが」

「ええ……自分で振つといて何故……」

「あとできる限りお前みたいな爆発玉の血を入れたくない」

「それには納得です」

あっさりと頷いて、ティナーシャは軽く膝を折る。

「では、そんな未来に至らぬよう、全力で取り組ませさせていただきます」

「……あまり根を詰めすぎるなよ」

白い魔法着を翻して立ち去ろうとする彼女に、オスカーは

声をかけた。ティナーシャは肩越しに振り返って微笑む。

「ご心配なく。私、貴方のお役に立つために来ましたから」

晴れ晴れと言いきって彼女は執務室を辞す。

その背を見送ったオスカーはぼんやりと、誰にも語らぬ感情について思いを馳せた。